

課題名 森林環境教育の持続的な推進に向けて～小学生を対象とした森林教室の現状と課題～

高尾森林ふれあい推進センター 山田 徹
山崎 美輝
磯田 伸男

1 課題を取り上げた背景

高尾森林ふれあい推進センター（以下、「高尾センター」と称します。）では、小学校等の依頼により、主に小学生4～5年生を対象とした森林教室を行っています。年間10数校、1校当たり60～90名程度の児童を受け入れています。

森林・林業を義務教育の中で学ぶ機会は、少なくなってきており、現在の学習指導要領では、小学5年生の社会科にて、森林を学ぶ時間が数時間程度、設けられていますが、それ以降、森林・林業を学ぶ機会はほとんどありません。地球温暖化や環境面等から森林の必要性は今後、ますます重要になってくるものと考えられます。森林教室を通じて、児童達がいかに森林・林業に関心を持ち、自分達のこととして考えてもらうきっかけづくりを作る必要性があると感じています。

森林環境教育を進めていく上で、特に小学生に対してどのような内容が効果的なのか、これまで高尾センターが取り組んできたことを振り返り、今後も継続していくために、組織体制づくり等も含めて考えていく必要が生じたことから、今回、取り上げました。

2 具体的な取組

高尾センターが実施する森林教室の内容は、「森林観察」「森林学習」「丸太切り」を主に行っています。森林観察は、高尾山国有林の一角をフィールドとして、約1.5Kmの歩道等を約1時間40分かけて歩きます。1班当たりの児童数は6～15名程度、6班に分かれて行動します。先頭に説明者（主に高尾センター職員）、後方にボランティアが付き添います。森林観察では、「森林の働き」を中心に、歩道沿いの「樹木や野草の特徴」「間伐の必要性」「森林の土壌」など実際に見

て、森林にふれあいながら解説を行っていきます。森林学習では、森林・林業について分かりやすくクイズや写真を取り入れながら講義（45分）を行います。丸太切り体験（45分）では、用意したヒノキ間伐材を1人1人がノコギリを使って輪切りにします。いずれも説明者側から一方的な話をするのではなく、児童達が自ら考え、行動できるようにしています。



図1 森林観察の様子

3 取組の結果

森林教室を行った直後、多くの児童達が「楽しかった」と回答します。より具体的に児童達がどのように感じたか等を判断するため、森林教室の感想文から読み取ることにしました。多くの児童達から、“森林のはたらきを理解することができた”“自然・環境問題に興味がわいた”“木の大切さが理解できた”“木の香りを感じた”等の感想があり、森林教室を通して、これまで何気なく見てきた木や自然のことについて、興味を引くようになったと思われます。学んだことをより深めていくためには、ただ単に話を聞くだけではなく、児童達が自ら五感を持って体験する要素を組み込むことで、児童達の記憶に残るのではと考えられます。

一方、森林教室に係るスタッフを見ると、1校あたり10数名の人員が必要となっています。また、より効果的に行うために、学校との連絡調整、説明する者の専門的知識の取得、スタッフ間の情報共有、安全管理体制、体験内容・場所の検討、必要経費等の事前準備が重要となります。

4 まとめ

フィールドの中で実際に体験しながら学習することは、効果的な学習方法と考えられます。今後、森林環境教育を継続し行っていくためにも、限れた職員配置の中で学校との連携を図りながら、どのように効果を高めていくか、今後、さらに検討していきたいと考えています。